



かつて行徳地域を流れていた内匠堀（昭和33年発行「目で見える市川」から）

国府台から真間にかけての台地は、下総台地の西端にあたります。その台地の周縁は、下総の国を治める国府が置かれ、万葉集に真間の風景や手児奈の歌が残された時代から見ると、かなり大きく崩されているものと思われまます。

真間の項（昭和六十三年十月号）でも述べたように、「ママ」とは、土地の崩壊している状態を指したアイヌ語から起ったものです。そこで、崩された台地の土砂が下流に運ばれて堆積した所を、ママが欠けてできた土地という意味で「欠真間」と名付けられたものと思われまます。だとすると、行徳の地域は、すべて「欠真間」ということになりまます。

これに対し、次のような説もあります。戦国時代、国府台を中心に数度にわたる戦乱が行わ

## ママが欠けてできた土地

### 欠 真 間

れたため、真間周辺の住民は生活に苦しみ、難を避けてこの地に移り住みました。そこで、本村の真間から分かれたという意味で、「欠真間」の地名が生まれたのだというのです。

欠真間の地域が本格的に

開発されていくのは、江戸時代に入ってからのことです。北条氏の落武者としてこの地に來住した狩野浄天は、幕府の許可を得て、当代島（浦安市）の田中内匠と協力し、元和六年（一六二〇）、行徳領の村々の灌漑用水路を引くために大柏川（谷地川）から浦安に通じる水路を開削しました。これが「内匠堀」または「浄天堀」と呼ばれ、一時はこの水路によって一萬石もの水田が潤った時代もありました。現在はすべて暗渠（きよ）になってしまいました。が、この内匠堀こそが行徳地域の農業開発に重要な役割を果たしたのです。

狩野浄天は芝増上寺の観智国師を開山に、西光山源心寺を建立しました。現在、浄天夫妻の墓碑と供養塔などが市の文化財に指定されていますが、その他に、狩野一族の供養のためにつくられた六地藏が残されています。六体のうち向かって左から二体目の金剛宝地蔵は、浄天菩提のために建てられたものです。

かつての欠真間は、現在の相之川二〜四丁目、南行徳一・二丁目、香取二丁目の一部、福栄一・三・四丁目を含む範囲を占めた、即ち江戸川から東京湾に面する広範な地域でしたが、区画整理事業や住居表示などによって現在の範囲になりました。

次回は「新田」を予定しています。

（社会教育指導員

綿貫喜郎）